

▶「大学までは進学させたい」母親が半数以上

「第2章 7. 将来像への期待」(60ページ参照)では、「一流大学を出て、望み通りの職業につける人」への期待が最も低いことを紹介したが、だからといって母親たちが学歴志向を否定している、と判断するのは早計のようである。

図2-16は、「子どもをどの学校まで進学させたいか」を属性別にクロス集計した結果を表したものである。まず「全体」をみると、「四年制大学」までの期待が高いことがわかる。「四年制大学」は59.9%で、「短期大学」「大学院」を合わせると71.8%という結果になった。一流大学を出て望み通りの職業につくことまでは積極的に望まないものの、「大学までは出てほしい」という母親の希望が表れていた。

「その他」を選ぶ人が6.9%いたが、この中の84.3%の人が、「本人が望むところに」と記入していた。ここには、子どもの「意志尊重」「個性の尊重」の一端がうかがえる。

▶男子と女子への進学期待の違い

男子と女子への進学期待には、明確な違いがみられた。図2-16の「性別」で、男女間で5%以上の差があったものは次のようになる。男子のほうが高かったものは、「四年制大学」(男子72.3%>女子46.8%)。女子のほうが高かったものは、「短期大学」(女子17.6%>男子0.2%)、「専門学校・各種学校」(女子12.7%>男子7.4%)であった。

毎年、女子の四年制大学への進学率上昇が話題になっているが、本調査では男子の母親のほうが、四年制大学への進学期待は高くなっていた。

▶進学期待と学年

図2-16の「学年」では、ほとんど違いはなかった。年少児・小1生で「四年制大学」がわずかに高いものの、これはこの2学年がほかの学年よりも、男子の比率がわずかに高いためと考えられる。

▶進学期待と習い事

図2-16「習い事」の、進学期待と「習い事をしていない・していない」をクロス集計した結果では、両者に違いがみられる。「習い事をしていない」子の親で「四年制大学」希望は63.3%であるのに対し、「していない」子の親の「四年制大学」希望は51.8%であった。

本調査では、16種類の習い事について、している・していないもたずねている(「第2章 9. 習い事の現状」64ページ参照)。進学期待とその各習い事をしている人とのクロス集計結果の一部も、図2-16「習い事」で示した。まず「地域のスポーツチーム」は、これに入っている子の親は、最も「四年制大学」希望が高いというもので、73.9%だった。これは16種類の習い事のうち、男子の比率が最も高かったためと考えられる。次に「受験のための塾や家庭教師」は、「大学院」希望が最も高いというもので20.0%だった。最後に「そろばん」は、「四年制大学」希望が最も低かったというもので、60.9%となっていた。

▶世帯年収と進学期待

また、世帯年収別にみたとき、最も「四年制大学」希望が高かったのは「1,500万円～2,000万円未満」世帯の72.9%だった。が、どの年取層においても、「四年制大学」までを希望している人の比率が最も高かったことも特徴であった。

●図2-16 進学期待×性・学年・習い事

